琉球大学学術リポジトリ

教養教育の見直しのための2、3の提言：琉球大学に即して

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学教育センター
	公開日: 2018-07-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 森田, 孟進
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42090

教養教育の見直しのための2、3の提言

―琉球大学に即して―

学長　森田　孟進

平成3年（1991年）に大学設置基準が大綱化され、授業科目の区分が弾力化されたことを受けて、本学においても他の多くの国立大学と同様に平成9年（1997年）教養部を廃止し、教養科目（本学では共通教育）は全学的責任において実施することになって今日に到っている。その間、大学教育センターを中心に教養教育の改革に努力してきたところである。教養教育の実施体制の弱体化を防ぐために、各学部に配分された教養教育に必要な教官定員は全学教育委員会（委員長＝学長）の管理下に置くこととし、各学部学科が提供すべき教養科目の授業時間数をノルマとして課し、大学教育センターの大学教育企画運営委員会においてその実施状況は厳しくチェックされてきている。

FDをはじめ、本学における教養教育改革の実績はこれまで6号まで刊行されている『琉球大学大学教育センター報』の内容が良く示しているところである。が、グローバル化の時代を迎える中でわが国の大学がそれぞれ個性化を目指している状況下で本学の教養教育のどこをどのように見直せば良いかを以下考えてみた。

1．2項対立の廃止

一般教育科目と専門教育科目の区分が大綱化によって廃止されたにもかかわらず、教養教育の重要性にかんがみて、かつて学生たちから軽んじられた一般教育科目は共通教育科目、教養的科目等と名を変えて存続し、その結果、専門教育科目との区分も従来通り継承されている。この区分は実際には対立関係にあって、学生の意識に対しても教員の意識に対しても従来の“一般教育科目”と“専門教育科目”の区分と殆ど変わらない悪しき作用を及ぼしていはしないか。両科目の有機的連携というが、有機的連携は学生の頭の中でなされるのであろうという冗談もあるほどである。この際、両科目の区分を廃止し、単に“授業科目”というものがあるという形にすることはできないだろうか。もちろん、これまで以上に教養教育へ実質的効果を考えることを大前提としてのことである。ただし、第1に、学部学科ごとにいくつかの充分に検討された履修モデルを作成して学生たちへ示すこと、第2に、米国の大学のシステムに学んで各授業科目には100番台から400番台まで番号を附して、学年ごとの履修基準を示すこと、第3に、文字通り全学的共通教養科目を精選して開設する。たとえば、それらは「科学史」「思想史」あるいは「文化史」のような総合的内容の科目となるであろう（この分野の専門家はわが国では数少ないという指摘がある）。また、環境問題に関する知識と関心は現代人の重要な教養のひとつとなっているが、本学では2001年のエコ・キャンパス宣言とその実践と併せて、環境問題関連の教養科目を整備充実しつつある。これらの科目群もまた精選された全学共通教養科目に加えることができるだろう。第4に、ある学部学科の専門科目として開設されている科目に他の学部学科の学生が受講した場合、教養科目として認めることにする―たとえば、工学部の学生が法文学部の専門科目「環境と文学」を受講した場合に教養科目として認定する。医学部の学生がフランス文学購読のクラス（医者が主人公のバルザックの『無神論者』がテキスト）に出席すれば、教養科目として認めるというふうに。この方法によって、学生の教養科目軽視と教官の教養科目の義務的担当意識が払拭されるという大きな効果が期待できる。

2. 外国語科目の振り替え

本学はアジア・太平洋地域に顔を向けた大学として21世紀のグローバル化の波の中で個性的大学を目指している。将来的には英語による授業を大幅に増設し、日本語を解しない外国人学生を英語による授業によって受け入れ、これらの外国人学生は入学後に本学の留学生センターで日本語を学ぶというシステムを作りあげたい。英語による授業のクラスには日本人学生と外国人学生が混在して共に学ぶ情景を私は夢見ているが、本学の現在の学生たちの中でいったいどの程度の数の学生が英語による授業へ出席しえる英語力があるのか、極めて心許ない状況にあるので、当然のことながら英語教育の改革と充実を推進しなければならない。教養科目の英語教育では既に本学独自のテキストの発行、目的別クラスの編成等々、充実強化に取り組んでいるところであるが、学部学科指定の標準単位数を超えて取得した英語の単位を教養科目の単位数として換算することによって、学生の学習意欲（注：1）を高めることができるであろう。振り替え換算の場合、学生自身の問題意識によって外国語を選択させることとする。すなわち、外国語は英語とは限らない。古典をテキストとする外国語購読の授業を教養科目として読み替えることができるシステムもきわめて有効と信ずる。

3. 琉大特色科目の精選充実と本学の個性化

琉大特色科目は外部評価においても然るべき評価を得ている科目群であり、本学の誇るカリキュラムである。2項対立を廃止すると同時に、現在専門科目として開設されている授業科目群の中から教養科目としてもふさわしいものを琉大特色科目群に加える。このことによってもまた学生たちの学習意欲を刺激することができるであろう。現在本学が地域貢献の一環として推進している「授業の全部または一部の公開」とも関連し、地域の人々の生涯学習の恰好の対象となるであろう。さらにまた、琉大特色科目のいくつかも授業が英語で行われれば、本学に学んでいる約250人の外国人学生にも大きな利益を与えることになろう。

4. 修養的教養教育の重要性

「教養」とは何かについては、中央教育審議会の『新しい時代における教養教育の在り方について』（答申）［平成14年2月21日］において極めて適切な説明がなされているので、私はここでは特に触れないことにする。同『答申』において「新しい時代に求められる教養の要素」としてあげられている5点の中で、「礼儀・作法など型から入り、身体感覚として身に付けられる『修養的教養』」に私たちは今日本学の学生たちの日常を見るにつけても注目したいのである。

わが国では伝統的に「修養」が人格完成のために重ぜられてきたのであって、「教養」という語は明治時代にはeducationの意味を持ち、ドイツ語のBildung、英語のCultureの訳語として使用されるのは明治末から大正時代にかけてのことであるといわれるが、この問題については筒井清忠氏の『日本型「教養」の運命』に詳しい（注：2）。今日なお「修養」による人格・品位の涵養を学生・全職員ともにキャンパス・ライフにおいて心がけるべきである。本学のエコ・キャンパス宣言とこの宣言に則って実践されている学生と職員有志によるボランティア活動を私はこの意味で評価している。現在、修養的教養教育のために大学で何ができるのか思案しているとこである。この場合、家庭の役割も重要であることは言うまでもない。

以上、本学の教養教育見直しのための方策について走り書き的に提示することを試みたが、大学教育センターを中心に大胆な発想のもとに研究開発し、全学的なコンセンサスを得て取り組むべき問題である。

注：1

学習意欲については、西本裕輝・浜崎盛康・大城武「教養教育の理念の理解と学習意欲の関連性－R大学における学生・教官調査に基づいて」（大学教育学会誌、第24巻第2号、2002年11月）。

注：2

筒井清忠著『日本型「教養」の運命－歴史社会学的考察』（岩波書店、1995）。また、森田孟進「『教養論』覚書－阿部次郎と三木清」（大学と学生、第456号、平成14年10月、文部科学省高等教育局）参照。